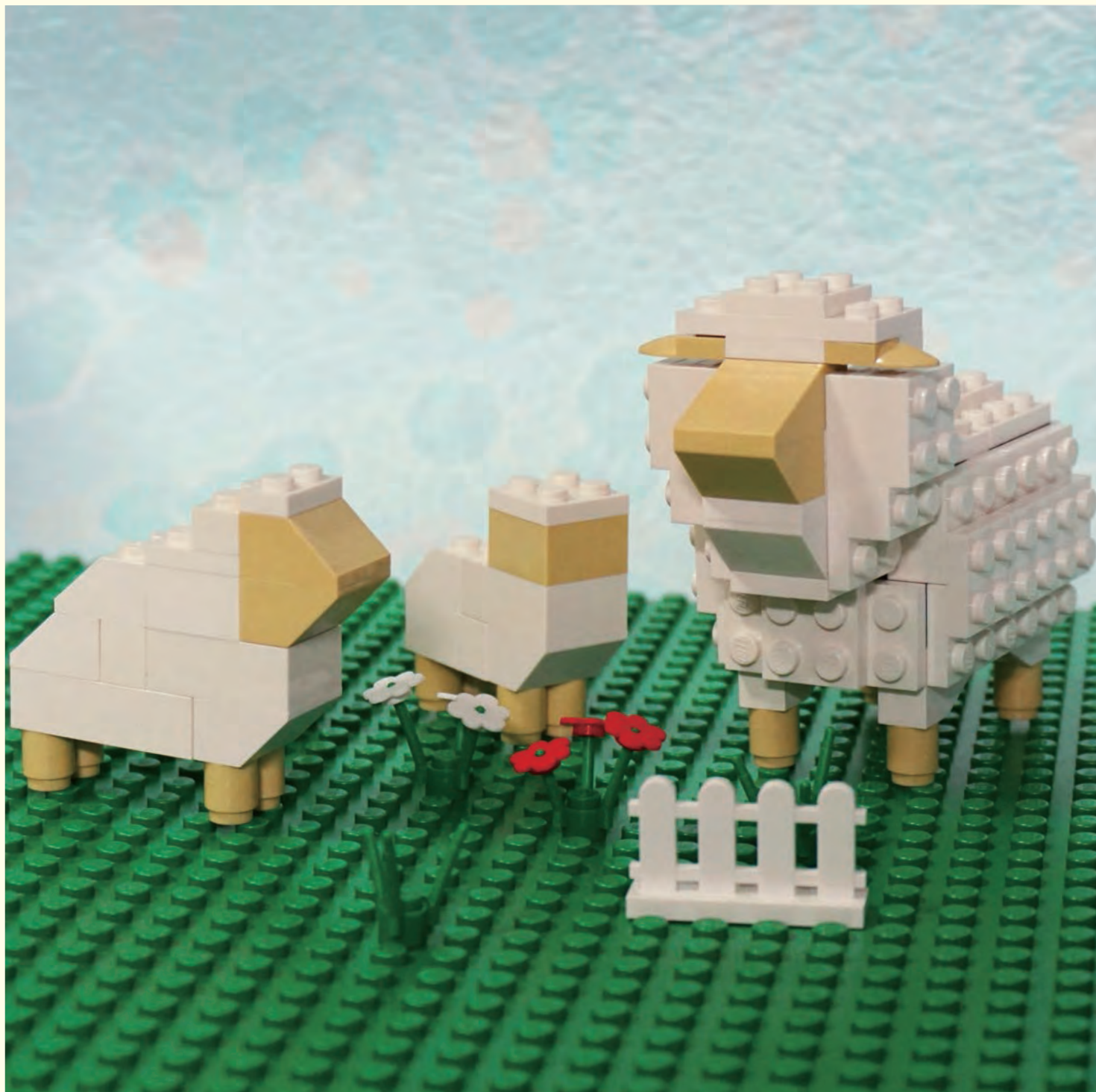


学内六報

2015.1.26

no.1463



濱田総長年頭挨拶

総長×学生×卒業生のトークで見る
「タフ&グローバル」

総長年頭挨拶



東京大学総長

濱田 純一

本当に必要と考える取組みを 着実に果敢にすすめよう

新年あけましておめでとうございます。

平成27年、2015年という年が明けましたが、今年
は戦後70年ということで、戦後の歴史、大きな変化
というものを振り返りながら、次の時代への展望を
切り開いていくということが、改めて強く意識され
る節目の年となっています。いまの日本の厳しい社
会状況と重ね合わせても、未来を築く基盤を生み出
すための改革が求められる年となります。政府レベ
ルでは、新しい日本の形をつくるべく、さまざまな
方面で従来の制度の見直しや規制改革などが行われ
ており、教育もその例外ではありません。大学につ
いてみても、ガバナンス改革や入試制度の改革など、
これまでの仕組みを大きく見直そうとする顕著な動
きが見受けられます。

こうした状況の中で東京大学として重要なことは、
つねに時代の一步前を先取りしながら、何よりも主
体性をもって、自分たちが本当に必要と考える取組
みを着実に、また果敢にすすめていくことです。こ
の間取組んできた総合的な教育改革も、そのような
姿勢を意識しつつ行ってきたものです。この4月から
4ターム制やカリキュラム改革、推薦入試の導入を
始めとする新しい制度がスタートすることになりま
すが、その制度の活用を通じて、東京大学の学生た
ちが、さらにタフに、そしてグローバルに活躍して
くれることになると信じています。

総合的な教育改革の中では大学院改革への助走も
すでに始まっており、4月からは五神新総長の体制
がスタートして、さらに本格的な展開がなされてい
くことと期待をしています。これら一連の改革を通
じて、世界の有力大学と競争し、あるいは協調して

いくための東京大学の教育力、研究力が、一段と強
化されていくことになるはずですが、これらは東京
大学の歴史の中でもかなり大規模な改革となり、教
員の努力はもちろん、学生自身の努力、そして職員
の努力が、それぞれの持ち場において求められます。
この場にいる職員の皆さまにも引き続きご尽力をお
願いいたします。

東京大学が主体的に取り組んでいくべきテーマは、こ
の他にも数多くあります。業務改革や人事制度の改
革は着実にすすめてられてきていますが、気を緩めるこ
となく、さらにいろいろな工夫を生み出していく必要
があります。また、私がとくに気になっている一つは、
男女共同参画、女性の活躍推進への取組みの遅れです。
女子学生や女性教員の増加、女性管理職の積極登用
などについて抜本的な策を講じていかないと、女性の
もつポテンシャルや多様性のメリットを東京大学とし
て十分に活用することが出来ず、そのことが大学の将
来の競争力に大きな影響を与える可能性について、強
い危機感をもっています。私の6年間の任期もあと3
カ月となりましたが、さらに出来得る限りのことを行
っていきたいと考えています。

残された課題はなお少なくありませんが、それ
でも任期当初から「森を動かす」という思いですすめ
てきた「行動シナリオ」FOREST2015の取組みも、
教育改革を始めとして、何とか動くところまで持っ
てくるのが出来たと思っています。これも教職員
の皆さまのご尽力があったからのことで、この機会
に心より感謝申し上げます。残りの3カ月間も緊張
感を緩めずに突っ走っていくつもりですので、引き
続きよろしく願いいたします。

この1年、皆様のいっそうのご活躍とご健康を祈
念して、私からの年頭挨拶とさせていただきます。

総長×学生×卒業生のトークで見る

「タフ&グローバル」

「濱田総長と語る集い」
2014.10.15@駒場

「総長と語ろう!“タフ&グローバル”」
2014.10.18@本郷

昨年秋、濱田総長が参加するトークイベントが相次いで行われました。一つは学生、もう一つは卒業生が相手の討論会です。両方の会でキーワードとなっていたのは「タフ」と「グローバル」。濱田時代としては最後となる年頭、総長が発し続けてきた言葉を2つの発言録(抄録)を通しておさらいしてみましょう。

総長×学生

濱田総長と語る集い
～教育改革と新学事暦で学生は変わるか～

出席者

- Aさん 4年
- Bさん 4年
- Cさん 2年
- Dさん 1年

※司会も学生の2人が務めました

- 濱田純一総長
- 林香里教授
- 藤井輝夫教授
- 矢口祐人教授



“制度を変えただけでは人は変わりません”

濱田●今日のタイトルは「教育改革と新学事暦で学生は変わるか」ですが、制度だけで人は変わりません。制度をどうやって使いこなし、どうやって実のあるものにするか。そこをがんばってこそ初めて人は変わります。教育改革はとっかかりにすぎません。皆さん学生にこの仕組みを使いこなしてほしいと思っています。
藤井●私はFLY Programを担当していますが、体験活動プログラムの立ち上げにも関わりました。もともとは理科I類から船舶工学に進み、いまは生産技術研究所で精密工学を研究しています。微細な加工技術を用いて、深い海の様子を調べるセンサーをつくったりしています。
林●私の人生は、いわばすべて留学でした。学部時代にアメリカとドイツに行き、その後はイギリスの通信社で記者をしました。いまは情報学

環でマスメディアとジャーナリズムを研究しています。東大の男社会に留学しているような気分です。
矢口●英語の教員として、アメリカの研究者として教えています。PEAKなどの留学生をサポートするグローバルゼイションオフィスの仕事もしています。私は東大出身ではなくアメリカの大学から東大に留学しているようなものかもしれません。
A●私は昨年7月から今年5月までシンガポール国立大学に留学し、現地では国際人権法などの授業を中心にとりました。学期途中で戻ったので、学期初めに行う履修手続きで個別に職員の方に対応いただきました。大学2年の夏にIARUのサマープログラムに参加したかったんですが、東大の必修科目の試験期間とかぶってしまって断念することがあります。
B●去年の夏から今年の夏に

かけて4つの海外プログラムに参加しました。私もやはり東大の授業の試験とかぶってしまい、先生にかけあって海外からレポートを出す形式にさせていただいたことがあります。
C●私は生まれてから18年間シンガポールで暮らし、高校卒業後に東大にきました。運動会バドミントン部、バンドサークル、東大新聞、駒場タイムズの編集にも参加しました。まだ日本には慣れていません。
D●昨年度はFLY Programの1期生として1年間休学し、ドイツの大学に留学したため、今年も1年生としてすごしています。東大入学からドイツの大学に入るまで半年間あったのはよかったです。でも、また留学するとしたら半年間空くのはもったいないので、カリキュラム改革には興味を持っています。
司会●新学事暦の目的は学生



総長×卒業生

総長と語ろう!
“タフ&グローバル”

第13回ホームカミングデー特別フォーラム

出席者

- 藤森義明さん(1975工) LIXILグループ取締役代表執行役社長兼CEO
- 猪子寿之さん(2001工) チームラボ代表取締役社長
- 松本麻美さん(2009教育学研究科) Active Connector CEO
- 大越健介さん(1985文学) NHKニュースウォッチ9キャスター
- Eさん 工学部4年
- 濱田純一総長
- 園田茂人教授



大越●今日は、グローバルというテーマについて、少しでも考えるきっかけと知的刺激になればと思います。では自己紹介を兼ねて一言ずつお願いいたします。
濱田●東大生の頭のよさを伸ばすにはタフでグローバルであることが必要、という思いをこめて、教育改革を進めてきました。タフでグローバルというのは、簡単に言えば、しつこくくじけずに物事にチャレンジし、自分と違う生き方や価値観に触れることなのかな、と思っています。
園田●私は以前、情報学環に英語だけで学位がとれるコースを作りましたが、そこでわかったのは、この試みは学部でこそ着すべきだということでした。今年度、東大がスーパーグローバル大学支援事業に採択され、タフでグローバルな学生を学部のレベルで作る方向に向かっている。いうは

易しいが非常に難しくタフな10年間が始まると思います。
E●私は昨年体験活動プログラムに参加しました。イギリスに1週間滞在し、経済と科学技術の分野で活躍する方々と現場感のある意見交換ができ、海外で働くイメージももてたと感じます。地球の裏とも簡単に連絡がとれ、行かなければ何もわからない時代ではありませんが、だからこそ現場での肌感覚を大事にすることが必要だと思いました。
松本●私は、ウェールズの高校で寮生活を送り、その後カナダに留学しました。学校に行けない子どもに教育の場を提供するNGOを立ち上げた後、東大の教育学研究科で勉強し、ガーナのユニセフでインターンとして働きました。卒業後は外資系企業で働きましたが、3.11の震災を機にパキスタンへ。現地では日

本のすばらしいものがなぜ世界展開していないのか、との声を聞き、日本と世界をつなげたいという思いで起業しました。「made in Japanからmade with Japan」をスローガンに、日本企業と外国人留学生との橋渡しをする事業をしています。

“異文化を知るより新しいルールをつくるのが重要”

猪子●僕は工学部を卒業し、大学院に進んだ後、テクノロジーと想像力で世界を変える会社を立ち上げました。たとえば、魚の絵を描くとそれがすぐ泳ぎだす遊園地など、デジタル技術と創造性を駆使して新しいアートを生み出しています。僕は英語が話せないし、外国人の友人もいないし、外国の文化は「知ったこっちゃない」。それより人類の未来を作ることが重要で、外国のルールを学ぶことよりも、新しいルールを作ることが重要だと思っています。
藤森●私は東大ではアメフト部で、
(次ページにつづく)



を海外に出すことだけではないそうですね。

藤井●FLY Programでは東北の自治体に行った学生もいましたし、体験活動プログラムでも、日本にある大使館でリサーチをするとか、海外の活動も国内の活動もある。必ずしも海外に行くというだけでなく、自分と違う価値観に出会う場に身を置くための学事暦だと思ってください。

“自分とは違う価値観に出会うための学事暦”

矢口●留学でいうと、学事暦の話が出てから、グローバル化オフィスに来る学生の数は非常に増えています。海外に行けばいいというものではないけれども、行かなければいいというものでもないですね。大学という居心地のいい場所から離れて自分をuncomfortableにすることで新しい知見を得ることができるはず。そういえば、東大に来た留学生が皆口にすることがあるんですが、なんだと思いますか。

会場●画一性でしょうか。

矢口●「東大はなんでこんなに男ば



かりなんだ」ということです。学生の82%が男という世界のトップ大学はほかにないですね。駒場にいるだけではこれがおかしなことだとは気づかないかもしれない。環境を変えて初めてクリティカルな視点で状況を見つめることができる。学事暦を利用していまいる場所を離れ、新しい視点を発見してほしいです。

司会●この会場も男性が多いですね。

矢口●ついでに言えば、先生も男ばかりでごめんなさい。

C●私は体験活動プログラムでフランスに行きましたが、エコール・ポリテクニクも男女比は8対2でしたよ。東大で感じたのは、実際は多くのプログラムがあるのに、留学生に情報が十分入っていないことです。大学は情報発信を強化すべきですね。それから、学生のマインドセットも問題。外国人と交流する機会が少ないし、サークルの先輩に迷惑をかけるから、と留学をためらう人もいます。

林●私の研究室にはたくさんの留学生がいます。多国籍の留学生といっしょにジャーナリズムの検証を行うと、いろいろな視点が出てきて、研

究が豊かになっていくのを感じます。価値観を広げるなら自分と違う人との対話が大事。日本のなかでも東大のなかでもそれはできます。

B●制度が変わればそれを利用する人は増えるかもしれませんが、もともとやる気がない人は制度が変わっても変わらない気がします。学生の意識を変える広報をすべきでしょう。

A●留学やインターンはやろうと思えば旧学事暦でもできます。障壁となるのはむしろお金。私が留学できたのは交換留学で現地での学費が免除されたからです。いままで以上に経済的援助をお願いしたいです。

濱田●マインドセットの話が出ましたが、秋入学は留学しやすいとか実

“制度の変更をマインドセットを変える契機に”

利的なことももちろんですが、社会のマインドセットを変えるのということがありました。従来の制度でもやりくりすればできないことはないですが、どうしてもやりくりしている感覚、日本は特殊だという感覚は残ります。制度改革には、マインドセットを変えていくきっかけとしての意味があると思っています。経済的事情については、大学も考慮し

ていて、外部の支援を募っていますし、最近は卒業生間でも学生を支援する動きが広がっています。ただ、自分で稼ぐことも考えてほしいですね。私も大学2年で初めて海外に行ったときには、半分を親に出してもらって半分は自分で稼ぎましたよ。

会場●僕は運動会フェンシング部で、他大学との交流がたくさんあります。4チーム制になるとそこに支障が出るかもしれません。運動会などの課外活動へのサポートをお願いします。

濱田●物事を変えると必ず従来のルールをどうするかという問題が付きまっていますが、具体的な支障についてはこれから一つずつ解決していきたいと思います。

矢口●私は運動会こそ国内に限らず外に出ていくべきだと思いますから、そのための工夫を考えてほしいです。

会場●学期を改革しても学生の意識が変わるかどうかが大変な問題。トップ層をさらにのぼすだけでなく、ボトムアップも必要です。そのためには危機感を押し出すようなイベントをやるべきではないでしょうか。

濱田●とんどんやりたいですね。物事を変えるには全体を巻き込んでいかなくてはなりません。部分ごとの変化の動きを全体に見せていくべき。

卒業後に商社に入り、35歳でGEに入社。アメリカで企業人として勝負した後、日本の会社を世界で勝てる企業にと思い、3年前にLIXILに入りました。英語が話せない社員がほとんどの中で学んだのは、なるべく早いうちにショックを与えるのが大事だということ。早い時期に東大生を海外に送り出す「海外体験プロジェクト」を始めたところです。

大越●私は、アメリカにいたときに一番苦しかったのが英語でした。やはり日本人には言葉の壁というものがありますよね。

藤森●商社時代、英語力では一番下の部類で、すいぶん訓練しました。たとえば20~30回同じことを口に出して繰り返すと、そのうち話せることが10倍に増えてくる。自分の言葉で繰り返すと、発音が悪くても話が伝わるようになる。アメリカに行って1年2年毎日やっていました。

濱田●共感します。ボキャブラリーを増やし、文法を覚えるだけでなく、どうやって伝えるかが大事。間違っ



もいから伝わればよい。狭い意味での言語ではなく、コミュニケーションする総合力が重要だということを感じてほしいですね。

“グローバルというときに常に英語の話になるのは変”

猪子●20世紀は言葉の世紀でしたが、いまはそうではありません。TwitterとInstagramのユーザー数を比較すると明らかにInstagramのほうが多い。Twitterは言葉、Instagramは写真によるコミュニケーションです。非言語のほうが影響力が強いのに、グローバルというといつも英語の話になるのは変だと思いますね。

大越●先ほどルールという言葉が出ました。ルールを作る側に回ればよいではないかという話でしたね。

E●私は、ルールを作るにはまず既存のルールがどんなものであるかを知らなければいけないと思います。

猪子●それは絶対に違うと思う。すべてのルールを知ることは不可能で、努力すべきは自分が当たり前だと思う常識を捨てること、ルールや文脈を捨てることです。

濱田●総長としては学生を援護したいので、ひとこと。学生の立場だと自分が守るべきものは何か、当たり前だと思っているものは何かわからないんです。学生はまず外の世界を見て何がルールかをつかむ



のが最初のステップだと思いますよ。

E●援護をありがとうございます。

猪子●僕は常識を掴む手段としての海外というのも難しいと思っています。たとえば10年前、世界のクラブに行くにロンドンやロンドンの音楽だし、バングラデシュはバングラデシュの音楽でしたが、今は全部一緒です。インターネットのおかげで海外でも体験の概念がだいぶ変わっている気がします。

藤森●実際に現地に行って感じる匂いや雰囲気と自身が交わる体験は絶対スマホなんかではできません。インターネットで情報は全部集まるが、そこに閉じこもってはいけません。

“海外にいると目覚めのスイッチが入りやすい”

松本●海外でも日本でも感覚が鋭ければ目覚めはあるでしょう。ただ、

海外に行くとき肌の色も言語も環境も違う中で、よりスイッチが入りやすいと思います。

濱田●情報が飛び交っているのとわかった気になりますね。でも実際にはわかっていないことが多い。たとえば建築専

攻の人は実際に海外に行って建物の壁に触って初めてわかることがある。それが大事だと思います。

園田●日本企業はモノがよければ売れると考える傾向がありますが、実際には言葉がないとわからないという人が結構いる。そこにアプローチするには、やはり語学を磨かなくてはいけない。そこは同時にやらなければいけないところかと思っています。

大越●松本さんは若い頃から海外を歩いているだけに日本と世界との関係を意識したのではないのでしょうか。

松本●日本の会社は、技術力に誇りがあるがゆえに、現地で必要とされないものまで提供しがりますが、世界の人々がそれを求めないなら、そこまでこだわる必要はないと思います。世界で何が必要なのか、今あるものをどのように変えていけばいいのかを考えたほうがいい。

ボトムアップももちろん大事です。
B●ボトムアップのイベントをやっても、ボトムの人はそもそも来ないので違うやり方もあるかも。

会場●イギリスに1年間交換留学しましたが、演習を4学期分履修しないと卒業できないという制度のせいで、4年で卒業したかったのに5年目も大学にいることになりました。こうした部分、柔軟に対応していただきたい。もう一つ。私は非常に得をしてきました。10回近く海外に行き

“支援を受けた人にはそれを返す責任があります”

ましたが毎回大学から金銭的支援を受けました。感謝していますが、意欲ある学生にだけ支援をすることではないのでしょうか。

濱田●いろいろなお金を集めることはトッププライオリティに近いテーマですが、当面は限られた人にチャンスがまわるのはしょうがないでしょうね。そのかわり、チャンスを得た人には周囲に何らかのリターンをする責任があると思っています。



会場●以前、教育改革の報告会があると聞いて会場に行きましたが、告知が十分でなく、学生はごく少数。現場の声が執行部に届いていないように見えました。どうして現場の声を吸い上げてこなかったのですか。

総長●ここに至るまで、学生の声は学生生活実態調査のアンケートなどを通して、教職員の声は各学部長を通して取り入れてきました。現場の声の反映は今後もできます。学生諸君もどんでん声を上げてください。

会場●私は大学の英語教育を楽しみにしていましたが、英語一列の授業を受けてみて高校と変わらないと思いました。もっと実用的な授業にならないのでしょうか。学事暦よりも授業そのものを充実させてほしい。

濱田●英語教育は、実践的なものであると同時に幅広い教養を培うためのものであってほしいと思います。

実践的な英語力は授業でつくとは限りません。様々な経験をするなかでつく力ではないでしょうか。

矢口●英語部会では、いつも授業がどうあるべきかを考えています。会話やプレゼンの機会を増やすとか、レベル別

授業を導入するとか、学生のニーズに合う授業提供に取り組んでいます。学生からも声を上げてほしい。

会場●声を上げるには、英語部会にメールすればいいですか？

矢口●それもいいし、授業のアンケートに書いてもらった声も全部読んでいますよ。

会場●4ターム制で、文系と理系で長期休暇の時期が異なります。理系の友達との活動時期がずれると交流しにくいと思います。寂しいです。

濱田●できれば一つの形にしたかったんですけどね。たとえば教養学部では、入学直後はすぐ休みにするのではなく、最初の4ヶ月はしっかり授業をしたほうが良いという考えがある。国家試験の時期が問題になる学部もある。さしあたりということでこの形に落ち着きました。休みのズレがあると、いっしょに旅をする機会は減るかもしれません。友人との交流については別のやり方で確保するようお願いしたいと思います。

会場●工学部は5学期授業になるようです。でも私がそれを知ったのはツイッター経由。他の学生も皆驚い



ていました。進振り前にこの重要な情報が届いていなかった。説明責任を果たしていないのでは？ また、新学事暦は新総長になっても続きますか？

総長●後者については大丈夫です。時間をかけて意見をまとめ、組織として決めたことですので、総長が変わっても大きな流れは変わりません。前者については、5学期になって勉強の機会が増えると思ってもらえるとうれしいですが、情報を十分に届けられなかったことは認識しています。もう少し早くお伝えすべきだったと思っています。

会場●来年度からは授業が朝8時30分開始になります。遠方から通学している学生への配慮は？

濱田●これは……朝からがんばっていただくということに尽きます(笑)。私も昔は8時30分から授業に出ていましたよ。遠距離通学でどうしても間に合わないなど、個別の事情については、大学の窓口にご相談ください。さて、じつはこの後、皆さんのためになる奨学金の用事があるので、ここで退出いたします。またこういう機会を設けて話しましょう。

藤森●私はシャワートイレを欧米の文化に根付かせてトイレ界のジョブズになりたい、と思っています。しかし、機能をそのままアメリカに持って行くと、どのボタンを押しているかわからないという。確かに日本人は自分のこだわる機能を押しつける傾向にあるかもしれませんが、もう一つ、日本は技術で勝って勝負に負けているという面がある。iPhoneのように、技術では勝ってもマーケティングで負けている。

“日本には技術力があるという前提を疑うべきです”

猪子●それは違います。たとえばOSを作れる会社が日本にありますか？ 日本は技術力がない国です。

藤森●そういうことではないでしょう。iPhoneもハードの面で言うといろんな国製の部品が詰まっている。ハードで勝負する時代はすでに終わっていて、どうやってデザインやマーケティングで勝負できるか、なんです。

猪子●日本に技術力があるという前提は間違いだ、と言いたいだけです。
濱田●言語や論理ではない時代との話でしたが、大学の立場から言うと言語や論理は大事です。それがあってこそそのデザインでありマーケティング

ング。そこを間違われると学生が勉強しなくなってしまうんですよ。

藤森●もしOSを作る会社がアメリカにあるならそこにつくってもらえばいいでしょう。

猪子●もちろんそれでいいんですが、技術力が高いという前提は素直に捨てた方がいいのでは？

大越●NHK的に言いますと、お二人には相当共通点があると思って聞いておりましたが、時間も少なくなってまいりました。一言ずついただきたいのですが。

E●プログラムに参加させてもらったからには、何かしら大学や世界に還元しなければならぬという意志はどの学生にもあると思います。でも、実際には学生の身分でできることは少ない。何か筋道が見えているとやりやすいのかもしれませんがね。

松本●海外に行かなければいけないわけではなく、多文化を受け入れる、他のものがあると気づくことが教育では重要です。外国人留学生と触れ合うことも大切。日本人でも、違う出身地の人とか違う部の人とか、違う人とどれだけ交流する機会を教育の場で多く作ったらグローバル感覚が身につくのではないかと思います。

猪子●えー、僕も本当はちゃんとし

ているんで、よろしくお願いします。

藤森●今後はもっとダイバーシティのある社会になります。女性ももっと活躍する社会、歳をとった経験者や猪子さんや松本さんが同じ立場で活躍できる社会、違う人たちが力を合わせる社会に。そこで大事なのは違いを尊重すること。大学には均一化しがちな面がありますが、違いの大切さはもっと教育すべきですね。

園田●その通りだと思います。均一的なテストで点をとる子を好む教員には、変わってもらわないといけないでしょう。要は、猪子さんのような学生を元気があっていいと教員が思えるかどうかです。

濱田●猪子さんのような人を大学が育てようと思っても無理なんですわね。ダイバーシティという言葉も出ていますが、教育はある程度均一でなければいけない。その中でいろんな可能性をもった芽を育てるということ。たぶん猪子さんも今の仕事に東大で勉強した事が全く役に立っていないとは言わないです。猪子●テクノロジーの会社なので、物理とか情報とか科学技術の原理はも



ちろんベースとなっていますよ。

“教育改革なんていらぬ状況になるのが次の夢”

濱田●よかった(笑)。じつは、私は大学紛争の時代に育ったので、大学がこんなに手をかけるのか、という思いはあります。ですが、今は仕組みを作らなければという思いで懸命に手を入れています。教育改革は成熟までに5年はかかりますが、10年後は仕組みを緩めるのがいいと思います。学生や企業、社会、同窓生が勝手に動かしてほしい。そう思います。教育改革は当面の夢で、もっと大きな夢は教育改革なんていらぬ状況になることです。その時にもダイバーシティは大事になる。いろんな分野の人や年齢層の人が交じり合い、大きなエネルギーが生まれる。これはまさに同窓会そのものです。

大越●時刻は12時56分になりました。本来、夜10時にニュースが終わる時に56分で終わるのは間違いですが、余韻を残しつつ、多様性のある対話を反芻しながら、本日の会合を終わります。

教養教育の現場から

第7回

リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取り組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学のすべての構成員がぜひ知っておくべき教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんのレポートでお届けします。

先輩に聞く～理系学生のキャリアパス～

／自然科学高度化部門シンポジウム「理系学生のキャリアパス」

教養教育高度化機構 自然科学高度化部門・特任助教

中村 優希

教科書や教材の開発を通して
自然科学教育の基礎を担う部門

自然科学高度化部門は、教科書の作成や補助教材の開発を通して、東京大学の教養や専門教育の基礎としての自然科学教育の向上に貢献することを使命として活動しています。

平成24年度までは、生命科学高度化部門として東京大学の前期課程学生に対する生命科学教育の定着に寄与することを目的とし、生命科学の教科書の作成をはじめ、インターネット上で学生ユーザーが問題を解きながら履修講義の内容を再確認できるシステム（LSキューブ）や、論文を検索するシステム（英文検索エンジンCSLSサーチ）など、学生の学習を補助するシステムの開発を行ってきました。また、留学生向けの英語版教科書の作成やそれらのWEB化も行い、本学のみならず世界中のユーザーに向けて発信しています。自然科学高度化部門となった平成25年度からは、化学や物理学を含

む自然科学の教科書の開発や、留学生を対象とした生命科学や化学の実習のための英語版実習書の作成を進め、本学のみならず我が国の自然科学分野教育の充実に努めています。

あまり配慮されてこなかった
理系のキャリア教育にも着手

就職難が続く今日、学生にとって卒業後の進路を考えることは何よりも大きな課題です。中でも理系学生は、修士や博士課程への進学、そしてその後の進路について悩みが尽きません。大学院の拡充においても、博士課程修了者は研究者以外のキャリアパスも考慮する必要があります。このような視点を、学部や学部の早い時期から持つことは学生にとって必ずプラスになりますが、これまで本学では、学部や学科の垣根を越えたキャリア教育を行ってきませんでした。そこで我々は、「理系学生に、修士や博士課程を卒業して企業やアカデミアで活躍している先輩たちのキャリアパスを聞いて、進路のヒントを得てもらおう」という趣旨で、平成26年10月25日にKOMCEEにてシンポジウムを開催しました。

企業からは、株式会社リバネス代表取締役CEOの丸幸弘さん、楽天株式会社執行役員の内川拓也さん、株式会社資生

堂の山崎亮太さんと株式会社ハビテックの石川善樹さんにお越しいただき、アカデミアからは、本学の薬学系研究科教授の楠原洋之先生と本部门より筆者が、それぞれ、現在のキャリアに至った経緯や仕事内容等の紹介をプレゼンテーション形式や対談形式で講演しました。講演後には、総合討論やMMホールでの懇談会を設け、学生から積極的に質問が出る等、講演者と学生たちとの交流も盛んになされました。

参加者は、学部生や大学院生をはじめ、教員や一般の方たちも含めて60名を超えました。アンケートには、「様々なバックグラウンドの方々から話を聞いて面白かった」、「熱い講演に刺激を受けた」、「駒場だけでなく、本郷でも開催してほしい」等、好意的なコメントが多数寄せられました。その一方、「とても興味深い内容だったので、もっと多くの人に聞いてもらいたかった」、「同日に、同じような趣旨の卒業生との交流会が開催されていたのが残念だった」といった声もありました。

日程のリサーチや、宣伝方法の改善等が今後の課題となりましたが、学生たちが進路を決断していく上で、少しでも役に立つ機会を、これからも提供していければと思っています。



↑シンポジウムのポスター。



↑シンポジウムでの講演の様子。

→総合文化研究科副研究科長の石浦章一先生（右端）をはじめとする自然科学高度化部門のメンバー。



ききんの「き」

—東大基金で森を動かす—

第21回

泉 泰行 渉外・基金課 一般職員

ききんのき座談会(前編)!! ～渉外・基金課とは?～

ききんのきでは先日行った座談会の様子を2回にわたり掲載します。本音で語る座談会を通じて東大基金を身近に感じてもらえれば幸いです。※ABCは各立場をまとめたもので特定の人物ではありません(下図)

——渉外・基金課の印象について、ざっくりと

C 「実は異動してくるまでこの部署の存在を知りませんでした。働いてみると職員と特任など立場は様々だけど、互いに協力し、うまくやっていると思います」

B 「ベンチャー企業に近いという印象かな。自由な雰囲気や任される仕事の範囲が広い。実行までの意思決定も思っていたより速いし」

A 「そうだね。ただ、意思決定のルートがよくわからず、これでいいのかなと思うときも正直あって……。良くも悪くも他部署に比べフラットな組織だと思う」

——営業活動ではなく「渉外活動」

A 「他の部署から見ると、うちの部署は営業というイメージが強いのかな」

B 「いやあ、実際は営業じゃないよね。商品やサービスを売っているわけじゃないから。交渉しながら寄附者と大学との接点を見つけてという意味で営業と似ているけど、営業経験者でも寄附は未知なる領域。渉外活動という点ではうちの部署に来た人のスタートラインは皆同じだと思う」

A 「そうそう。その分、自分の訪問が寄附に結びついた時はとても達成感を感じるね。渡した名刺を目の前で折られるとか嫌な思いをする事もあるけど(笑)」

C 「寄附金の獲得はもちろん、そのお金をどう活用するのか、学内の調整や振替業務などの細かい作業も大事だと思っています。そういう意味では全員で渉外活動をしているといえるんじゃないでしょうか」

A 卒業生や法人を訪問し寄附の依頼を行っている。最近異動してきた人から3年以上在籍している人まで様々。

B 法人を担当し渉外活動を行っている。営業経験を買われて来たものの想像以上に難しいなと思いつつ、逆にそこにやりがいを感じ日々奮闘している。

C 寄附プロジェクトの企画や入金管理、領収書発行、銘板の管理などを担当。寄附をいただいた後も意外とやることは多いです。

次回後編は「愛校心と寄附」。

東京大学基金事務局 安田講堂改修寄附事業に協力を!

TEL 03-5841-1217 E-mail kikin@adm.u-tokyo.ac.jp
内線21217 URL http://utf.u-tokyo.ac.jp/

留学生さん いらっしやい!

第19回



海を越えて東大に来た学生に聞きました。

ブラジル



ロドリゴ・フォルテス さん(左)
アンドレア・バグエニスキー さん



Rodrigo Fortes
Andrea Bagniewski

工学系研究科建築学専攻
修士1年(夫)/ 修士2年(妻)

日本が好きになり、東大に来て共に建築を学ぶ仲良し夫婦。美術館や建築を見て回るのが好きな二人は、充実した学生生活とプライベートを満喫しています。

Q. どうして日本/東大に来たの?



留学中の姉を訪ね、日本に夢中になりました。私も夫も建築家として働いていましたが、若いうちに外国に住みたいと思っていたので、迷うことなく日本に来ました。日本の建築は世界で有名で、建築といえば東大ですからね。

Q. いま学んでいるのはどんなこと?



僕は日本建築の先端デザイン戦略を研究しています。妻は日本の建築材料の現代建築への応用を研究しています。日本で学んだ知識をいつかは母国で役立てたいけど、今は大きなプロジェクトで経験を積みたいです。他のアジアの国々へも行ってみたい。

Q. 日本/東大で困ることは?



日本語には苦労してるよね。最初は戸惑うことが多かった。例えば、銀行口座開設に苦労したり、携帯を買うのに4時間もかかったり。一週間で慣れましたけどね。

Q. 東大で夫婦が学ぶ際の長所は?



一緒にいる時間が長いから、お互いに助け合えることが最大の長所だと思います。先生やスタッフのサポートも心強いですね。

Q. ブラジルのいいところは?



出身都市のブラジリアは信号がなくて渋滞もないんですよ! 車で15分あればどこでも行ける生活が懐かしい。ちなみに、写真はブラジリアのスリーパワーズブラザにある建物です。



協力: 国際センター本郷オフィス 制作: 本部広報課

ワタシのオシゴト 第107回

RELAY COLUMN

カブリ数物連携宇宙研究機構
(Kavli IPMU)国際交流係

鷗川 健也

“世界トップレベル”を支えるために

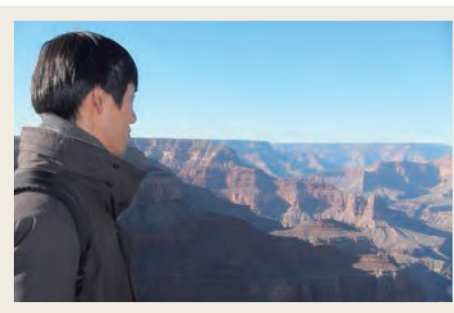


年末の職場でこの原稿を書いているところ。

Kavli IPMUは文科省の世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)のもと2007年に設立されました。研究者の3割以上を外国人とするなど、国際的な研究環境を有する優れた拠点の形成が目指されています。

国際交流係は、現在約40名を数える機構所属の常勤外国人研究者に対して、来日のための査証申請手続から人事関係手続、住居、研究費の獲得・執行、日常生活までを幅広く支援するとともに、機構主催の国際研究集会の開催、機構を訪問する他機関研究者の滞在も支援します。私の主な担当は研究費の執行や外部資金の申請に係る支援業務で、基本的には外国人研究者の出張、調達、外部資金への応募等に際して本人と担当係との間に立つ仕事です。旅費や研究費に関する通知・規則等の多くは和文のみなので、それらを英語で説明(たまに全文英訳)することもあります。

一言で外国人と言っても国籍も文化的背景も様々。国際研究拠点として外国人の受入れは当然必要なのですが、生半可なことではないと実感させられます。



2年前に訪れたグランドキャニオンで。

得意ワザ：長文メール…(短くまとめるのが苦手?)
自分の性格：細かく几帳面。自分の事は優柔不断で適当
次回執筆者のご指名：遠藤暢雄さん
次回執筆者との関係：公私ともお世話になっている先輩
次回執筆者の紹介：“もりかも”の生みの親

Crossroad

産業界と大学がクロスする場所から、産学連携に関する“最旬”の話題や情報をお届けします。

産学連携本部

第110回

アントレプレナーシップ教育のグローバル化

「自分のアイデアや研究成果を事業化する」起業の考え方や方法論を学ぶアントレプレナーシップ教育を、産学連携本部では10年間担ってきています。その中心となる「東京大学アントレプレナー道場(アントレ道場)」は2014年度で10期目を迎え、累計参加者1823名、修了者241名を数えます。そんなアントレ道場も、学生が「よりグローバルに」活躍できるよう年々進化してきました。

2008年から始まった北京大学との交流プログラムには、アントレ道場で優秀なビジネスプランを作成したチーム(3~4チーム)が参加でき、北京大学の学生チームと互いのビジネスプランを競い合います。今年度は東大から4チーム9名が参加し、北京大学生と混成チームを作って、中国のベンチャー企業から課された実際の事業課題に対してビジネスプランを提案してきました。異国の地で海外の学生と一緒にリアルな事業を考えるという経験は、「タフな東大生」を育成する絶好の機会であると言えます。

さらに2013年に始まった「Todai To Texas」プロジェクトでは、シード権を持つアントレ道場生以外にも、一般枠で在學生と卒業生起業家も選考会に参加できます。これは世界最大のベンチャーの聖地のひとつ「South by Southwest(SXSW)」の展示会出展をかけたコンペで、世界中から集まるイノベーターに自分のプロダクトをお披露目できます。

起業なんて考えたことがない学生も、自分の事業計画を世に問いたい学生も、気軽に参加してみてください。



2014年12月、北京大学にて。

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

インタープリターズ・第90回 バイブル

総合文化研究科・教授 長谷川 壽一
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

研究不正対応と研究推進

去る12月26日、東京大学科学研究行動規範委員会は、分生研旧加藤研究室において1996年以降16年間に公表された論文165本のうち33本が不正であると認定した、とする最終報告を発表した。不正行為が認定されたのは11人、うち6人については「懲戒事由等に相当する可能性がある」と判断した。これほどまでに長期にわたり、かつ大規模な研究不正が生じたことは本学のみならず国内研究機関で例を見ず、濱田総長は「誠に遺憾」「学術の健全な発展を揺るがした」と述べ、自戒の意を込めて報酬のカットを表明した。

当日の記者会見では、不正申立て以降、調査に時間がかかり過ぎているのでは、との質問も出たが、調査対象となる論文数ならびに関係者（約200名）が非常に多く、図や原データも膨大で、慎重な専門的判断を要することから時間がかかったとの回答だった。濱田総長は、今後起こりうる訴訟にもしっかり堪えうる万全の調査だったことを強調した。

私はこの事案の調査に直接関わったわけではないが、本部理事の一人としてこの間の経緯を傍から見ると、結論に至るまで、科学研究行動規範委員会の教員および担当事務職員がどれだけの時間を費やしたか、気が遠くなる程である。委員の教員は当然研究者であるし、調査を担当した研究推進部は、本来、研究推進が第一の役割である。にもかかわらず、不正論文の対応で、多くの時間を失ってしまった。記者会見場では、調査に要した費用はどれほどだったかの質問もでた。金額に換算するのは困難だが、もしこの調査がなければ発表できたはずの論文数は、調査対象論文数よりはるかに多かったに違いない。研究不正事案は分生研の論文不正だけではないので、研究上の損失は甚大である。

私が危惧するのは、不正対応によって、研究時間が削られることだけでなく、本来、大学における研究がもつ自由闊達な意欲や空気が必要以上に萎縮してしまうことである。車の運転同様、アクセルとブレーキとステアリングがあってはじめて、研究は正しく力強く前に進む。この件を機に新ガイドライン（本調査開始までの期間設定、半数以上の外部有識者、利害関係者の排除）が整備された。抑止力が高まった分、安心してしっかりアクセルを踏めることを願っている。

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>

救援・復興支援室 より

第44回

本学の救援・復興支援室の最近の状況や、遠野分室の日々の活動の様子をお届けします

救援・復興支援室の活動(1月～2月)

1月～2月	福島県相馬市「寺子屋」学習支援ボランティア
2月4日	第23回救援・復興支援室会議

ザシキワラシの日常

本部企画課係長(遠野分室勤務)



文：佐藤 克憲

本学が東日本大震災の被災地で協力を行っている学習支援ボランティアの学生募集・派遣等について、同ボランティアの経験者によって設立された学生団体UTVC（東京大学復興ボランティア会議）が、本年度より本学ボランティア支援班と協力して運営を行うようになりました。

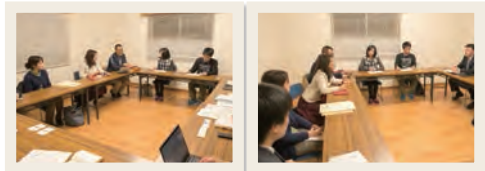
昨年12月12日、岩手県陸前高田市「学びの部屋」を主催している同市教育委員会及び一般社団法人と、UTVCを含む本学との「意見交換会」を、同市内において行いました。

先方からは、「学びの部屋」開始の経緯にはじまり、仮設住宅の前にある校舎に「学びの部屋」の明かりが点いているだけで仮設住宅に住む生徒に安心感を与えていることなどの説明があり、本学に対する要望として、本学学生の長期休業時期に平日の夜3日連続で同じ学生が学習支援活動を行う「スリーデイズ・プログラム」を、途中で学生が変わってもよいので例えば5日連続などにできないかとの提案がありました。

本学からは、ボランティア支援班は「スリーデイズ・プログラム」関連で来年度の学事暦変更に関する説明を、UTVCは教科指定の学習支援を、本学活動日に行うことの提案等を行いました。

先方から直接本学に対する考え方を確認したことで、本学の学習支援ボランティアの学生募集・派遣等も、地元の生徒と本学参加学生の両方のニーズを踏まえたよりよいものになっていくことでしょう。

今回もお読みいただき「オアリガトガンス!」。



(左) 意見交換会の様子(左側一般社団法人)。※UTVC提供
(右) 意見交換会の様子(右側教育委員会)。※UTVC提供

http://www.u-tokyo.ac.jp/public/recovery/info_j.html
Email : kyuenfukkou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
内線 : 21750 (本部企画課)

トピックス

全学ホームページの「トピックス」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/topics/>)に掲載した情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
12月8日	本部学生支援課	第1回検見川運動会が開催されました	11月30日
12月11日	教育学研究科・教育学部	大学院教育学研究科・教育学部留学生懇談会の開催	11月19日
12月12日	産学連携本部	東京大学産学連携協議会「アドバイザーボードミーティング」を開催	11月20日
12月15日	本部留学生・外国人研究者支援課	平成26年度第2回「外国人留学生支援基金奨学生証書授与式」開催される	12月11日
12月15日	教育学研究科・教育学部	平成26年度教職課程・学芸員等実習報告会および懇談会を開催	12月8日
12月15日	教育学研究科・教育学部	教育学研究科附属心理教育相談室・臨床心理学コース共催シンポジウムの開催	11月30日
12月18日	附属図書館	本部棟1階ロビー展示のお知らせ	9月30日
1月5日	広報室	濱田総長年頭挨拶	1月5日
1月9日	カブリ数物連携宇宙研究機構	第4回WPI合同シンポジウム「サイエンスがつなぐキミのミライ」を開催	12月13日
1月15日	本部総務課	2014年度業務改革総長賞表彰式の開催	12月19日

お知らせ

人事異動情報など全学ホームページ「お知らせ」(<http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/>)・東大ポータル等でご案内しているお知らせを一部掲載します。

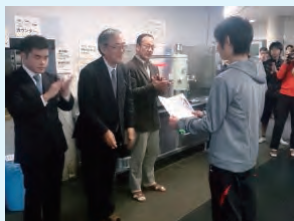
掲載日	担当部署	タイトル	URL
12月22日	本部研究推進企画課	J-A-D-N-I 研究に関する第三者調査委員会の調査報告について	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/3454/
1月5日	本部人事給与課	人事異動（教員）	http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/人事異動（教員）
1月19日	本部広報課	退職教員の最終講義（2月開催分）	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/3556/



CLOSE UP 第1回検見川運動会を開催 (本部学生支援課)



さあ、いざスタート!



優勝おめでとう!

2014年11月30日（日）、検見川総合運動場・セミナーハウスにて、(一財)東京大学運動会主催、本学共催のもと、本学構成員、特に学生がスポーツに親しむ機会を設けることを目的として、第1回検見川運動会が開催されました。大会当日は晴天に恵まれ、135人の参加者はそれぞれ事前にエントリーした、クロスカントリー（丘陵地等を走破する競技）、フットサル、テニスいずれかの競技に臨みました。

検見川総合運動場は、1964年の東京オリンピックにてクロスカントリー競技が行われた歴史ある会場です。50年近く経った今でも整備の行き届いたこのコースは、現在でも多くのプロランナーがトレーニングに通うほど、厳しいコースでもあります。

クロスカントリー競技に参加した50人は、10kmの部・5kmの部に分かれてこの難コースに挑みました。文字通り、山あり谷ありの厳し

いコースを走り切った参加者たちは、一様に安堵感と達成感に満ちた表情を見せていました。

表彰式では、各競技・各部門にて優秀な成績をおさめた参加者に、(一財)東京大学運動会の古田元夫理事長より、賞状と副賞が授与されました。また、クロスカントリー10kmを最も良いタイムで完走した学生に、本学の戸渡速志理事より「東京大学総長杯」ならびに副賞が授与されました。

(一財)東京大学運動会は、本学構成員がスポーツに親しむことを目的として、様々なスポーツイベントを開催しています。サッカー・野球等の学内スポーツ大会、新入生を対象としたスポーツ大会である「駒場運動会」、運動部による競技講習会など、その種類は非常に多彩です。最新情報は(一財)東京大学運動会HPにて告知しておりますので、ぜひご覧ください。



CLOSE UP

2014年度業務改革総長賞表彰式を開催

(本部総務課)



総長から表彰状を受け取る受賞者。



受賞者によるプレゼンテーション。



受賞者一同。総長を囲んで記念撮影。

2014年12月19日(金)、伊藤国際学術研究センター伊藤謝恩ホールにおいて、2014年度業務改革総長賞表彰式が開催されました。

表彰式では、業務改革推進室が全教職員を対象に募集した業務改革提案課題等のうち、厳正な審査のうえ選考された総長賞2件、理事賞2件、特別賞2件に対し、濱田総長及び戸渡理事(業務改革担当)から表彰状並びに副賞が授与されました。

引き続き、濱田総長が職員に向けて講話を行いました。総長から職員へのメッセージとして、日々の業務をより良くしようという意識、業務改革の文化が広がり定着していくことがとても大切、表彰を受ける課題が「大きな宝物」であるならば、日々の仕事の中でちょっとした工夫といった「小さな宝物」もたくさん生み出していただきたい、数多くの改革提案が出されているが、まだまだ取組をしていく可能性は十分にあると思っている等の言葉が贈られました。

また、受賞者による取り組み内容のプレゼンテーションも行われました。当日は約250名の教職員が参加し、受賞を祝うとともに、優れた業務改革のアイデアを共有しました。

本年度の受賞課題については以下のとおりです。

●総長賞

「国際交流事業に係る各種手続きの電子化-1週間を要する作業が5分で可能に!-」/国際交流課学振事業担当(代表者:近藤翔午)

「留学生向け銀行口座開設支援臨時窓口の設置」/本部留学生・外国人研究者支援課(代表者:齋藤智)

●理事賞

「[知の森]強化プロジェクト~部門間協力による学術情報の社会還元」/「知の森」強化プロジェクトチーム(代表者:高祖歩美)

「医学部附属病院における省エネルギー対策工事・運用改善の成果報告」/医学部附属病院管理課・施設管理チーム(代表者:三井亮平)

●特別賞

「医学部における教職員向け事務手続きサイトの開設」/医学部ホームページWG(代表者:小林みちよ)

「液体ヘリウムの回収純度および回収流量のリアルタイムモニタリングシステムの構築/駒場低温サブセンター(代表者:今井良宗)

※以下URLにて、プレゼンテーション資料をご覧いただけます。(※学内限定)

業務改革総長賞受賞課題の一覧:

<http://www.ut-portal.u-tokyo.ac.jp/wiki/index.php/業務改革総長賞受賞課題の一覧>



CLOSE UP

留学生懇談会を開催

(教育学研究科・教育学部)



自己紹介する新入留学生。

教育学研究科・教育学部では、11月19日(水)18時より山上会館「御殿」において、新入留学生を歓迎して留学生懇談会を開催しました。懇談会には、留学生、教職員、日本人学生あわせて45名が出席しました。

北村友人准教授(国際交流委員会委員)の司会のもと、南風原朝和研究科長による開会の挨拶に続き、牧野篤教授(国際交流委員会委員長)の発声による乾杯で、懇談が始まりました。

会半ばには、10月から研究科・学部仲間入りした新入留学生の自己紹介があり、研究テ

ーマや将来の抱負などを明るく、思い思いに語りました。その後、一人ひとりが写真等交えて母国(中国、モンゴル)の食べ物、文化、名所、伝統楽器等について紹介しました。プレゼンテーションはこの日のために留学生が準備したもので、緊張しながらも堂々とスピーチしていました。写真で紹介のあった名所へ「是非行ってみたい」といった声や、普段触れることのない文化や伝統楽器等、参加者一同とても興味深く聞き入りました。

<http://www.p.u-tokyo.ac.jp/archives/1945>

表紙について



12年前の「学内広報」1253号では東大牧場の羊が表紙を飾っていました。

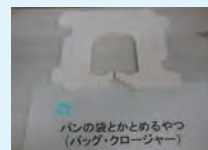
実は本誌「学内広報」には、新年1号目の表紙にその年の干支にまつわる画像を掲載するという伝統があります(1978年1号目の392号がその端緒)。吉例に則り、今回は、毎年五月祭や駒場祭で話題を集めている東大LEGO部に、羊をテーマとした作品製作(と撮影)をお願いしました。作品タイトルは「羊



昨年の五月祭で展示されたLEGO部の大作「日本銀行本店」。

親子の正月」。代表の青山真樹さんによると、「羊の親子が紅白の花を囲んで団欒している場面を作りました。右の親羊はレゴのボッチ(突起)を前面に出して、毛のもこもこ感を表現しました」とのこと。今年の東大は「あったかいだからあつ」(謎)。

→東大LEGO部 <http://toudai-lego.6.ql.bz>



昨年の駒場祭では「パンの袋とかとめるやつ(バッグ・クロージャー)」がネットで大きな話題に!



改革が攻め寄せてきた

1968年に全学を巻き込んだ「東大紛争」から50年近くになる。そして2015年3月には、この年に入学し紛争を体験した世代が、65歳の定年退職を迎え東大からいなくなる。この時代には、さまざまな意味で大学の改革が提起されたが、その成果は紛争の激しさにもかかわらず穏健で限定的だった。

それに比べて、いつ頃から私たちはこんなにもあくせくと「改革」を求めるようになったのだろうか。紛争時代に大学改革を叫んでいた若者たちが、大学の管理的な地位に就くようになった頃から、せわしなさが増してきたようにもみえるのはうがち過ぎかもしれない。しかし、この10年余の動きの激しさは、まるで嵐が攻め寄せてきたようだ。毎年のように何か新しいことが始められ、立ち止まることは遅れるだけと言わんばかりに追い立てられている。

100年前、まだ農村地帯だった世田谷の片隅に寓居していた徳富蘆花は、都市化の波に襲われたことを「東京が攻め寄せてきた」と表現し、人々が金勘定に振り回され、気ぜわしくなった様子を描いている。この光景が現在の大学の姿に重なる。

リーダーシップの下に推進される改革への大号令が、研究や教育の現場からの熟慮を経ずに発せられ、日々攻め寄せ、否が応でも対応を迫る。平穏さを追いやる暴風のなかに置かれていると、2つの奇妙な感覚に陥る。一つは、風向きが変わりやすく、追い風も逆風も横風もあるから、方向感覚が定かではなくなったこと。だから、何のために何をするかが明確には感得できなくなる。もう一つは、自らの職場のことが他人事に思えてくること。今日の大学と明日の大学は、どうじたばたしても変えられてしまうのだとすれば、考えるよりはほかの大学に移ったと思って慣れればいい。どのみちどこに行っても、同じような嵐に巻き込まれるのだから。こんな状況が進むと、大学に求められる自己革新という原動力を、将来を担う若い世代から奪うことになるのではないか。

武田晴人
(経済学研究科)